

2. 研究成果

設定課題 1. 群れの統合機構に関する研究

ヤクザル地域個体群における分裂群の遊動域の形成機序とその要因の分析

増井 憲一(京大・理)
丸橋 珠樹(京大・霊長研)

1974年以来、屋久島サル調査隊によって国割岳西斜面地域個体群の継続調査を行なう一方、1975年より丸橋を中心として、habituationと個体識別によって、ヤクザルの群れの社会生態学的調査が行なわれてきた。集中調査対象群となったKo群は、1976年、1977年に2度にわたって分裂し、1978年には、Mursou群、Ark群、Hiendo群の3群となっている。本研究では、これら3群の個体数調査と土地利用について調査を行ない、新群の遊動域形成の機序について研究を行なった。

個体数は、1979年夏には、Mursou群:22頭、Ark群:17頭、Hiendo群:17頭であった。出産数は、3群で計9頭であり、オトナメス1頭当りの出産率は約0.5であった。また1才児の死亡率は低かった。1979年5月に、Hiendo群より第1位オスが離脱し、以後社会的に不安定な状態となっているが、他の2群は安定した状態を保っている。

Hiendo群の遊動域は、旧Ko群行動域の南の部分に固定していたが、Mursou群とArk群は遊動域を大巾に重複させていた。そして、これら3群の遊動域を合わせても、旧Ko群の遊動域からはみでることはなかった。これらの群れの上部に位置していたNina群の遊動域は、バサミイシ谷においてより下方に拡大し始めている。1977年に比べて群れ間の出会いの頻度は低下した。しかし、Mursou群の出会い時における攻撃性は増加していると思われる。このことは、遊動域の形成とTerritorialityとの関係を考える上で示唆的である。

地域個体群の広域調査においては、新たに2群の群れ構成が詳細に明らかとなり、都合計9群の個体数が明らかとなったことになる。また、日本野生生物基金の助成により田川教授(鹿児島大学)を隊長として、本地域の植生調査を共同で行ない、

植物環境の量的把握を行なった。

野生ニホンザルの母子関係

西田 利貞(東大・理)
長谷川真理子(東大・理)
長谷川寿一(東大・文)
土屋 聡(市原市五井小)

前年度までの調査結果を検証し発展させるために、1978年度は以下の点に関する調査が行なわれた。対象は、高宕山第I群の1978年生まれの子どもの母子ペア(13組)である。

- 1) 基礎的な繁殖データの収集
- 2) 生後1年までのアカンボウの成長、発達に関する詳細な記載
- 3) 母性行動の個体差の分析
- 4) alloparental behaviorの記載と分析、1976年からの継続調査で得られた結果は、次のように要約される。

1) 野生のアカゲザルの出産率は、70~90%という報告が多いが、これに比較すると野生ニホンザルの出産率はかなり低く、高宕山では平均54%であった。

2) メスの年齢、出産歴によって、出産間隔、出産時期、およびさまざまな母性行動に差が見られた。すなわち、初産の母親はアカンボウの抱き方、運び方がぎこちなく、扱い方が未熟で、アカンボウの生後6か月以内の死亡率が経産の場合よりも高かった。かつ、離乳が遅れる傾向があり、その影響を受けて、2番目のアカンボウの出産時期が、出産期の終わり頃になる傾向が見られた。また、豊富な出産歴を持つ中高年齢の母親は、早くから、授乳の拒否などのアカンボウに対する攻撃的行動を示し、その度合いも強く、その結果、離乳がより早く完了し、翌年も連続して出産する傾向が認められた。

また、初産をむかえる以前に母親をなくしたメスの母性行動は、アカンボウに対する攻撃性が非常に強く、アカンボウの死亡率が高かった。